The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新たな仕方で世界を描くこと : 前期サルトルの哲学的企図についての試論
Author(s)	赤阪, 辰太郎
Citation	年報人間科学. 2016, 37, p. 87-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54575
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈論文〉

新たな仕方で世界を描くこと
――前期サルトルの哲学的企図についての試論

赤阪 辰太郎

要旨

本稿の目的はフランスの哲学者ジャン＝ポール・サルトル（1905-1980）の前期著作群を、与えられたあり方とは別の仕方で世界を組織化することを可能にするような理論の探究、という一貫した哲学的企図をもつ試みとして提示することにある。

『情動論素描』（1939）と『想像力の問題』（1940）においてサルトルは、情動と想像のなかに、所与の現実を上書きする能力を見出す。この契機は、情動論では行為の不可能性において発見され、想像力論では自由の問題と関連づけて論じられる。その後、『存在と無』（1943）の行為論では、以前の業績を踏まえつつ、現実的な状況への介入について論じられる。ここにわれわれは、世界の組織化の意味の変化、つまり、主観的印象から、実際の行為による外在化への移行を見出す。戦後の著作でサルトルは書く行為について論じる。書く行為は、言語のもつ共有可能性を理由に、他者にとっての世界経験を否応なしに変える。われわれはここに、所与の世界にもたらされた変化が他者に伝播し、間主観的な広がりを獲得することを発見する。

キーワード

サルトル、現象学、非決定論、想像力、自由

1. はじめに

本稿の目的はフランスの哲学者ジャン＝ポール・サルトル（1905-1980）の前期著作群を、われわれに与えられたあり方とは別の仕方で世界を組織化することを可能にするような理論の探究、という一貫した哲学的企図をもつものとして提示することにある。検討の対象となるのは第二次世界大戦以前（および戦中）の著作である『情動論素描』（1939）、『想像力の問題』（1940）、『存在と無』（1943）および、戦後に発表された実践的文学論『文学とは何か』（1948）とその関連テクストである。哲学的なモチベーションの内的な連関からサルトルの戦前・戦後の活動に一定の連続性を見出すことが本稿の課題となる[1)]。

従来、サルトルの哲学は第二次世界大戦における従軍体験を期に全面的に転換したという主張がしばしばなされてきた。この背景にサルトル自身の発言があるとはいえ[2)]、ここに偶然性について形而上学的思索を展開したアンチ・ヒューマニストとしての戦前のサルトルと、行動する知識人としての戦後の政治的サルトルを、人物にまつわる伝記的情報に基づいていわば分断し、どちらか一方を論じるという読み手側の意図が影響していないとは言い切れないだろう[3)]。

しかし、われわれが以下で示すように、第二次大戦以後のサルトルの思想、とりわけ語る行為と有責性というアンガジュマン文学を特徴づける傾向は、それ以前の著作にみられる基本的な方針と併せて評価する方が自然なものである[4)]。さらに、戦前戦後のサルトルの哲学的なモチベーションについて一定の連続性を示すことができれば、戦後のしばしば哲学論文の形式をとらないテクスト群について、その理論的意義をより詳細に描き直すことが可能となるだろう。本稿はその試みに向けた予備的な作業という側面をもつ。

あらかじめ本論の議論を素描しておこう。はじめに『情動論素描』と『想像力の問題』が検討される。この二著作では本稿が前期サルトル哲学に見出す〈与えられたあり方とは別の仕方で世界を組織化する〉というはたらきが、主体のそなえる機能のなかに位置づけられる。われわれは、行為の不可能性に対峙したときの情動的反応を通じて（『情動論素描』）、あるいは非存在対象という彼方の側から現実を再照射することのなかに（『想像力の問題』）、上のはたらきを発見するだろう。このことは情動論において行為の不可能性というネガティブな場面で取り上げられるが、想像力論ではよりポジティブな仕方で、さらにはサルトル哲学を特徴づける概念である自由と関連づけられつつ語られるだろう（第２節）。

情動と想像は主体のそなえる先に述べた機能を示す典型的なものだが、しかしそれらは１）現にある世界に実効的に介入するわけではなく、２）さらに、基本的には当の能力が問題となる特定の事例のなかで論じられるものだった。『存在と無』でサルトルは以前の探究を通じて手に入れた成果を取り入れつつ、行為一般の構造を論じる。そこでは、現に存在するわけではない未来についての構想が、行為という仕方で実行される場面が描かれる（第３節）。

そして、戦後のサルトルは所与の現実への介入についての理論を、語る行為ないし書く行為にまで拡張してゆく。書くことは、言語を通じて他者にとっての世界経験を書き換える可能性をもつ（第４節）。

2.『存在と無』以前

本節では『存在と無』以前の著作『情動論素描』と『想像力の問題』を検討する。本稿の意見では、両テクストはいずれも〈与えられたあり方とは別の仕方で世界を組織化する〉という、サルトルのテクストに見出される自由の最初の形姿と関係している。

2.1 『情動論素描』

『情動論素描』においてサルトルは情動émotion（怒りや悲しみ、恐れ等）について現象学的な見地から考察を行う。同書は心理学的学説を批判的に検討する第一章、精神分析的な情動論を検討する第二章、現象学的な学説として自身の見解を述べる第三章からなる。本稿にとって重要なのは、同書においてサルトルが情動を決定論的なものから逃れるものとみなす点である。以下、本稿ではこの決定性批判を二つのタイプに分類し、それぞれを機械論的決定論、プラグマティックな決定論と見定めた上で検討し、この過程を通じてサルトルの同書における狙いを明確化する。

A）機械論的決定論

情動について論じる際、サルトルは情動の機械論的な説明を退ける。この批判は主として心理学研究に向けられる。サルトルの批判にしたがえば、ある種の心理学者は意識を世界から孤立したひとつの閉域ないし内面性として定義し、情動を意識の状態état de conscienceの一種と解釈した上でその内部の探求を行う[5]。批判を通じてサルトルは、情動を世界から隔離された閉域における状態変化としてではなく、世界との関係そのものとして提示する。

機械論的説明はさらに生理学的機械論と、エネルギー論的機械論に区分できよう。

生理学的観点から情動を説明する際、情動は生理学的事実としての身体的反応（血流、体温変化、神経細胞の発火）の強度と対応するようにして類型化される[6]。その際、意識の状態を構成する生理学的諸事実は主体の抱く情動と相関的である。この説明に対するサルトルの批判は、『意識に直接与えられたものについての試論』におけるベルクソンの量的差異の批判的吟味に類似して[7]、次のことに向けられる。すなわち、情動のもつ質的差異の、観測可能な客観的諸状態における量的差異への還元である。サルトルは経験の水準に定位しつつ、「強いよろこび」と「怒り」は質的に異なるが、生理学的事実としては同程度の強度をもつことに言及し、心理学者のもつ諸前提からは経験上有意にあらわれる両者のあいだの差異を説明できないとして批判する（EE21-22）。

次にエネルギー論的な仕方で情動を説明する場合を検討しよう。短く言えば、この観点に立つとき、情動はある望まれた行為の挫折の結果、その行為において必要とされるはずであったエネルギーが転化されて生じるものとなる（EE23-24）。さらに、この学説は以下のことを前提している。すなわちエネルギーの湧出、剰余、転化の原理を一定の恒常性を保った法則として措定し、意識状態にもたらされる変化を所与の法則に従って、ある個体のもつ意識の状態の範囲内で説明するという前提である。しかし、そこには説明上の困難が生じる。エネルギー論的機械論において情動の発生の起源と目されるのは、ある企図された行為の挫折である。しかし、この挫折は未だ現実化されていない事態を目的として定立するはたらきを前提することで、言いかえれば、意識状態における欠如存在、あるいは外部への志向性を前提することではじめて可能となる（EE24-26）。こうして、情動を閉域としての意識の内部に生じる生理学的かエネルギー的な変化から定義することには内的な限界が見出される。

B）プラグマティックな決定論

以上の批判を経て、サルトルは情動を世界に向けた意識の関わり方、彼の言葉では「世界を把握するある仕方une certain manière d’appréhender le monde」（EE39）と定義する。この定式化によって、第一に、意識を世界から隔離し、その内部における変化を記述する心理学的方法から距離がとられ、第二に、意識を世界との関係性として、志向的なはたらきとして捉えることが可能となる。

> 情動的意識は、はじめには世界についての意識conscience *du* mondeなのだ。［…］実際、恐れている人があるものについて恐れていることは明らかだ。暗闇のなか、陰気でひとけのない通りで感じる

> そこはかとない不安の一つをとっても、人が恐れるのはやはり夜や世界のある相貌についてである。（EE38-39）

上の引用にみられるように、サルトルは情動を対象志向的な意識作用として規定する（夜道のある光景についての恐怖、目の前の友人に向けての怒り等）。さらに、情動における対象把握は「世界の変形 transformation du monde」（EE43）と表現される。つまり、サルトルにとって情動はある仕方で世界の相貌を描き直すことなのである。では、このとき「世界の変形」とは何を意味するのだろうか。それは、通常の成功した行為である「適応した行動」との関係から明らかになる。「適応した行動」が失われるとき情動があらわれ、世界の変形が成し遂げられる。

> ただし、通常の適応した行動においては、「実現すべき à réaliser」対象は、いくつかの道順を踏んで実現されるべきものとしてあらわる。それらの手段は各々で、現実存在を要求する諸々の潜在的なもの potentialités としてあらわれる。こうした目標 but に達するための唯一の可能な道としての［…］手段の把握は、世界の決定論のプラグマティックな直観と名づけることができる。この観点からわれわれを取り巻く世界――ドイツ人たちが環境世界 Umwelt の名で呼ぶもの――、われわれの欲望、欲求、行為の世界は、一定の各々の目標へ、つまりひとつの創造された対象の出現へと導く狭く厳正な道によって筋目をつけられたものとしてあらわれる。（EE42）

サルトルの記述に従えば、ある目的（「実現すべき対象」、「目標」）に基づいて行為を企てる際、その目的が具体的であれば、実現のための手段は当の目的から連鎖するかたちで自動的に規定される。そして、引用部の「世界の決定論のプラグマティックな直観」という表現にみられるように、われわれの行為は規定された手段の連関についての、実践という観点からの把握――それは必ずしも知覚的なものに限られないだろう――の上に成り立っている。

以上の議論の背景をなしているのは、ハイデガーの『存在と時間』第十五節および第十六節における、用具的存在者の網としての環境世界にかんする記述であると考えられる。ハイデガーは同書第十五節において、存在を開示し解明するという同書の目的の副次主題として、環境世界における存在者との交渉、すなわち使用される道具の分析を行う。現存在は用具的存在者と使用的行為を通じて関わる（配慮的交渉）。道具のもつ重要な特徴は、それが単独で存在することがありえず、「道具が存在するには、いつもすでに、ひとまとまりの道具立て全体がなければならない」（Heidegger1927, p. 68/上p. 161-162）ことである。道具との交渉を通じてなされる日常的な行為は、道具が示す「～のための」という連関、「～を指示する」という連関のなかに組み込まれている。サルトルはハイデガーの示した道具のネットワークとしての世界構造を、行為者がそこから抜け出すことができず、絶えず指示および後続の指示たる別の道具へと送り返される出口のないもの（「狭く厳正な道」）と捉える。つまり、サルトルにとって道具連関の網のなかに身を置くこととは、主体が〈プラグマティックな決定論〉のなかに身を置いていることと同義なのである。

C）道具連関の欠損についての二つの解釈――ハイデガーとサルトル

注意しておくべきことだが、以上の図式は道具が十全に作動しており、欠如や故障なく機能する場合にみられるものである。よく知られるように、ハイデガーは道具の欠如や破損のなかに存在者がもつ用具性とは異なった特質、すなわち自体性の露呈を見出している。道具の破損や欠如は、普段埋没している（サルトルの言葉を用いれば潜在的なものにとどまっている）指示関係を顕在化させ、欠損した当の存在者を含んだひとつの全体性として浮かび上がらせる（Heidegger1927, §16）。

他方、サルトルはハイデガーの図式を転換させ、同じ事態を人間の行為の観点から描き直す。サルトルにとって道具連関に欠損が見出され、世界に多くの穴が穿たれているという事態は、主体にとっての世界の「難しさ」として捉えられる。

> もちろん、あちらこちらに、ほとんどいたるところに落とし穴があったり罠があったりするので、この世界は玉転がしのパチンコ台に例えることができるだろう。［…］玉は一定の道順を通って、しかも穴に落ちないようにして、一定の道のりを走らねばならない。この世界は難しいのだ。（EE42-43）

引用部にみられるように、サルトルは道具連関の欠損を「落とし穴」や「罠」と表現する。彼がここで扱うものはハイデガーが道具の欠損に見出したものと重なり合う。世界の「難しさ」そのものは「私との関係を暗示するような反省的な観念ではない。それはそこに、世界の上にある」（Ibid.）。この点を踏まえた上で、サルトルはこの「難しさ」が主体にもたらす効果に注目する。ハイデガーが道具とそれを含む全体へと赴く一方で、サルトルが世界の上に見出す「難しさ」は別の事実に、つまりそれを体験する主体の側に差し向けられるのである。ハイデガーとの対比によって際立つのは、サルトルが導入するフッサール＝デカルト的な前提、すなわち、世界との相関項としてのコギトという前提である。世界にあらわれた失調は、それを体験する私の観点から捉え直され、行為の不可能性についての私の経験として記述される。情動とは、こうした世界の耐え難さに対する主体の反応のことである。サルトルは続ける。

> 定められた道があまりに難しいか、道を見失ったとき、われわれはもはやこの切実で難しい世界のなかにはとどまることができない。あらゆる道が塞がれ、なおも行動しなければならない。そのときわれわれは世界を変えようとする、つまり、あたかも事物と潜在的なものとの関係が決定論的過程によってではなく、魔術によって規則づけられているかのように世界を生きようとするのだ。（Ibid.）

行為の不可能性という耐え難い現実に直面し、さらに、それに対処する実効的な手段が存在しない場合、主体は世界との関係性を仮構的に組み替えることによって対処するだろう[8)]。このとき行為とは別の仕方での変化を担うのが「魔術」である。困難への直面ははじめ情動をもたらすが、引用部で「魔術」と呼ばれるものは情動を通じてもたらされる対象への価値づけの変化を指している。魔術とはここで、ある対象が現に備えている性質とは別の性質を、当の対象に付与する作用を意味する。特定の性質を対象に付与す

ることによって、その対象への価値づけは変化する。そして、この変化を通じて既存の目的-手段の連関は編み直され、魔術以前に与えられていた世界と自己との関係は変容する。

情動それ自体は実在的な世界に介入し、世界に実効的な仕方で働きかける行為ではない。しかし、それは少なくともある主体にとって世界と自己との関係性を作り替えるものであり、その意味で世界を新たな仕方で描き直すはたらきである。サルトルは以下のように述べる。

> 情動的な行動は、特定の手段を介して対象そのものに現実的にはたらきかけることを目的としているのではない。それは対象に対して、この行動によって、対象の現実的な構造は変えないで別の性質を、より少ない存在ないし現前（またはより多い存在など）を与えようとする。一言でいえば、情動において、身体が意識に導かれつつ、世界にその性質を変えさせるために、自己と世界との関係を変えるのである。(EE44)

上の二つの引用の直後でサルトルは有名な「酸っぱいブドウ」の童話に言及する（EE44-45)。この例に即して議論を要約しよう。ブドウの取れない世界という所与の条件は、目的に対する手段の不在から、キツネに対して行為の不可能性を開示する。そのことは怒りや失望としてキツネに体験される。さらにこの情動的反応を通じてキツネは木の上のブドウに、現にそうであるか不明な性質「酸っぱさ」を付与する。そこから、キツネはブドウが酸っぱいような世界を、すなわち、情動によって変形した世界を生きるようになる。ここでブドウを含む世界全体とキツネとの関係は結び直されている。

2.2 『想像力の問題』

『情動論素描』においてサルトルは情動を世界との関係の結び直しとして描いた。しかしそこでは、情動は自由の概念と結びつけられてはいなかった。続く『想像力の問題』においてサルトルは、想像を不在もしくは非存在の対象の措定として記述する。そして、それを全体としての世界の組織化に不可欠なものとみなす。さらに彼は、世界内に位置づけられない対象との関与である想像作用を導きの手として、状況からの離脱が成し遂げられる点に注目する。主体が状況から離脱しうるとき、そこに自由が見出される。

1940年に出版されたこの著作は、「意識の非現実化する機能である想像力と、そのノエマ的相関者たる想像的なものについて記述すること」を目的としている（IMR13)。同書でサルトルは『イデーン　I』期のフッサール現象学を利用しつつ、同時にそこから離反しながら自身の想像力論を構築する。そこで想像は、想像の素材となりそれを惹起する支持体（アナロゴン）を用いながら不在ないし非存在の対象を直観する経験として記述される[9)]。本稿にとって重要なことは、同書が所与の現実とは別のものを捉える意識のはたらきを扱っており、さらに、そのはたらきを介して状況からの後退可能性が論じられている点である。以下では、想像的意識の一般的な構造を概観した上で、想像作用と自由との関係を論じる。

A）想像的意識

『想像力の問題』における議論の出発点として、サルトルは〈イメージとは意識のなかに生じた事物あるいは事物に匹敵するうつしのことだ〉とするイメージの内在説を批判し、古典的な学説に代わって意識の現象学的な定式を参照する。「志向性という考え方そのものがイメージという考えを刷新させるような使命をもっている」（IMT144）。志向性からイメージを捉えなおすとき、それはもはや意識に内在する事物のコピーを意味するのではなく、意識が外部へ向けて炸裂する際に対象を志向する作用そのものを意味する[10)]。

サルトルにとって想像とはフッサールが『論理学研究』において探求した記号的意識のように、直観によって充実されることを待っている「空虚な志向」を意味するわけではない。『論研』において記述されるように、記号意識が問題となるとき、記号の理解を通じて参照される意味についての措定作用は伴われる必要がない。一方で、サルトルにとって想像とは不在物の直観であり[11)]、そこには想像に特有の措定作用が含まれている[12)]。

知覚的意識が対象を存在するものとして措定するのと対照的に、想像における判断は否定を含むとサルトルは論じる。彼の分類によれば、想像意識の措定作用は四つの形式をもつ。すなわち、不在のものとしての措定、非存在のものとしての措定、他の場所に存在するものとしての措定、措定の差し控えとしての中性化[13)]である。この四つの措定作用を指してサルトルは「想像する意識は対象を無 néant として措定する」（IMR30）とまとめ、他の意識作用と区別される想像の際立った特徴とする。

B）想像的対象が存在しない世界としての現実的なものの組織化

上記のように、想像は否定的な措定作用を含んだ直観として定義される。こうした定式化を経た上で、『想像力の問題』の結論部では、想像が現実世界の把握との関係から論じられる。サルトルによれば、想像においてわれわれは現実的なものから分離された領域に対象を見出す。このことから、想像は世界の彼方を設定する作用として理解される。彼方の側から現実を再照射するならば、世界は分離された想像の対象が存在しないようなあるひとつの全体性として新たに組織化されている。以上が、想像力論にみられる世界の再組織化の概略である。

より詳細にみてゆくために、サルトル自身が用いる例を出発点として検討を加えよう。サルトルは想像を潜在的なものへの地平的意識と対比しつつ、両者が関わる世界のあり方の差異を記述することで想像の特性を際立たせる。唐草模様のカーペットが床に敷かれており、その上に椅子が載せられているとしよう。カーペットの隠れた模様を地平的に意識する際、顕在的知覚的意識の周囲を構成する地平への意識は、残りの模様を現前野の周囲ないし底に「連続するもの」として comme *se continuant*」捉える（IMR347）。そのため、この場合に「与えられていないもの［隠れた模様］を現実的なものとして措定することは、与えられているものを私が把握するその仕方のうちにある。［…］現実の所与を知覚することは、それを総体としての *comme ensemble* 全体的現実を基礎として知覚することである。この現実は少しも私の注意の対象にならないが、現に知覚されている現実の存在［見えている部分］のための本質的条件として知覚的現

実と共-現前する」(Ibid.)。周囲意識は世界の見えていない部分、不在の部分と関与するとはいえ、そこには全体として与えられた現実との連続性が常に保証されている。この点において、見えている部分と共に現前する不在の部分は、所与の現実把握のあり方を組み替える可能性をもってはいない。それは与えられたものと地続きにあり、またそのことが周囲意識の本質を構成している。

他方、隠れた模様を想像するならば、その模様は否定的判断によって現実から分離され、孤立させられるだろう。「たしかにそれは現実に、彼方、安楽椅子の下に存在し、私が模様を目指すのはそこ là-bas なのだが、しかし、私が模様を、現に与えられていないそこにおいて目指すことによって、私はそれを私にとっての一つの無として把握する。こうして想像作用は同時に構成し、孤立させ、無化する」(IMR348)。地平意識における連続性と対照的に、想像的意識は否定的判断を通じて連続性に切断を加え、そこに非連続を導入する。

さらに、現実から分離され、孤立した対象の側からすれば、今度は現実の方が全体として否定されたものである。「一つのイメージを措定することとは、現実全体の埒外に対象を構成することであり、そのため、それは現実から隔たりを置き、そこから身を離し、一言でいえば現実を否定することである」(IMR352)。想像が否定によって対象を孤立させ、世界の外に位置づけることを意味するとき、否定された対象の側からすれば、この作用は世界を当の対象が存在しない全体性として把握するはたらきにそのものを意味する。

さらに、ここで想像は自由の観念と結びつけられる。「こうして非現実的定立作用はわれわれに否定の可能性をそれが成立するための条件として引き渡すのだが、この否定とは、全体性としての世界の〈無化〉を通じてのみ可能であり、この無化は意識の自由そのものの裏面であるものとして開示される」(IMR353-354)。世界は想像された対象が存在しない全体性として否定的に統合されるが、この操作を行う主体の方は、否定的判断をもたらすことそのものにおいて状況からの後退を行う。ここにサルトルは「自由」の名を与えているが、この自由とは、想像を通じて状況から離脱し、世界を新たな仕方で組織化する能力を言い当てたものである。

以上のことをうけて、想像は世界からの後退と（世界からの超出)、自己を超越する世界の構成の意味を込めて「乗り越え＝超出 dépassement」[14] として特徴づけられる。ただし、乗り越えは想像に限定される作用ではない。「意識にとっては実際、現実的なものを乗り越えて *dépasser* それを一つの世界にする仕方は他にも数多く存在する。乗り越えはまず感情性、あるいは行為によって果たされることができるし、そうでなければならない」(IMR355)。前節でみたように、情動とは世界を所与のあり方とは別の仕方で把握する能力であった。ここではその作用に乗り越え＝超出という名前が与えられ、次節で検討する行為の問題と並んで言及される。

3.『存在と無』

本稿がこれまでみてきたように、サルトルは所与のあり方とは別の仕方で世界を捉える能力をいくつかの仕方で問題化している。たしかに、情動と想像とは事象の上で大きく異なる。そして、両者を並列して

論じ、比較を通じて共通項を取り出す作業を現象学的な探究と呼ぶことはできない。しかし、われわれは情動と想像が、並列して分析しうる事象であると主張したいわけではない。ここで重要なのは、上でみてきたことがらが、サルトルにとって、主体のもつある特別な機能を示す典型的な例だったということである。個々の意識作用についての検討を通じて解明されてきたこの機能――それはわれわれが冒頭で掲げた前期サルトルの哲学的企図と重なるわけだが――は、異なった意識作用の分析を跨ぎながら、彼において一貫して探求され続けている。このことを踏まえて、以下ではサルトルの次の歩みに目を向けたい。

これまで扱ってきたタイプの作用は、存続する世界そのものに介入し、それを変化させるわけではなかった。後に彼が『文学とは何か』において「直観は沈黙であり、言葉の役割はコミュニケートすることにある」(QL27)と述べるように、変えられた相貌は外化され、正当化されなければその場で潰える主観的な印象にすぎない。初期の二著作にみられた課題は、『存在と無』における行為論において、変化の現実的な行使について論じられる際に乗り越えられる。『存在と無』は前期サルトルの哲学的な集大成と呼びうる大著であり、そこで扱われる内容は多岐にわたる。しかし、ここでは本論の趣旨にしたがって話題を限定したい。以下では同書において行為が担わされた世界の相貌を変えるはたらきについて論じ、それ以前の二著作における探求の成果が受け継がれている点を指摘しつつ、それとの差異を示したい。

3.1 行為と目的

『存在と無』の第四部第一章は行為の分析にあてられている。サルトルは同章冒頭付近で行為を次のように定義する。

> 行為する agir とは、世界の形姿 figure を変えることである。行為するとは、ある目的の観点から手段を配置することである。それはまた、［道具連関の］鎖の輪のひとつにもたらされた変化が、一連のつながりと結びつきによって、その連鎖全体のうちに変化を引き起こし、ついに予測された結果を引き起こすような道具的組織的連関を生み出すことでもある。(EN477)

先に『情動論素描』について論じた際にみたように、サルトルは道具連関の鎖というハイデガー的な世界の記述を前提しつつ、情動を通じた性質の魔術的な付与のなかに所与の道具的連関から離脱する可能性を見出していた。しかし、情動論で問題となっていたのは行為の不可能性、不適応であって、そこでは現実的な道具連関の再編と、現実世界への実効的な介入という論点は前景化していなかった。『存在と無』では新たに行為の観点から道具連関の再配置が語られ直す。さらに、以前は行為の失敗といういわばネガティブな側面に焦点が当てられたが、この点が『存在と無』では自ら目的を設定し能動的に行為を組み立てるというポジティブな視点から捉え直される。

さらに、サルトルは連鎖の変化が目的の観点から行われると指摘している。目的は以下の引用にみられるように、与えられたもののなかに欠けているもの、必要とされているものとして立てられる。この論点は先に想像力論について論じた際に見出した、非現実的なものの導入という論点と重なり合う。

行動は必然的に、そしてその条件として、ひとつのなくてはならないものの認知を含む。いいかえれば、行動とは、ひとつの対象的欠如の認知、あるいはひとつの否性の認知を含む。［…］要するに、行為の構想［目的］が生じて以来、意識は、自己の意識する充実した世界から身を退き、存在の領域を離れ、非存在の領域へと近づくことができたのだ。（EN478）

以上のように記述するサルトルにとって、目的の定立とは世界に欠如したものを非存在として構想することである。ここでは、『想像力の問題』において自由と状況の再組織化を言い当てる経験のなかから取り出された知見が、目的の設定という実践的な場面のなかに導入されている。ただし、想像が認識論的な観点にとどまっていた一方で、『存在と無』では行為を定義するために非存在を通じた世界の再組織化が語られる[15)]。

行為の目的は状況内の機能不全や主観的な要求によって促され、いわば自動的に生成するのではないか、そして、この生成は前節で批判的に扱われた決定論の範囲内で解釈可能ではないか。そう問われるかもしれない。この点についてサルトルは、行為を促す現実的要因は目的という未来に属する非存在者の側から捉え直され、組織化されることによって行為にとって有意味となると考える。彼は行為を促す客観的な状況（動機motif）と、欲求や感情[16)]のような主観的要因（動因mobile）を区別するが、この両者はサルトルにとって、望ましいもの、来るべきものの成就にむけた文脈のなかに位置をもつことで、状況の変化にとって意味をもちはじめる。言い換えれば、目的は動因と動機にとって論理的な優先関係をもつ。

サルトルは恐怖を動因の例に挙げながら、以下のように記述している。「私がみじめな給与に甘んじるのは、言うまでもなく、恐怖のためである――しかも、恐怖は一つの動因である」（EN481）。しかし、この恐怖は「私が「危険に瀕している」ものとして捉える一つの生命の維持という、理想的に立てられた一つの目的の内においてしか、意味をもたない」（Ibid.）。一見すれば、私の恐怖が先行し、みじめな給与に甘んじるという一定の態度を促すかに思われるだろう。サルトルはここで、恐怖が餓死の恐怖という形で、動因そのものとして自己を提示するとき、その恐怖はひとつの理想的な目的、ここでは生命維持という目的とかかわっている点を指摘する（Ibid.）。態度決定（行為）と恐怖（動因）のあいだを結ぶ非存在者としての目的（生命維持）が論理的に先行するとき、これらの諸契機は有機的に統合され、ある一連の文脈のなかで機能をはたす。

次に、動機とは「行為を理由づける理性的考慮の総体」（EN490）であり、「状況についての客観的評価として特徴づけられる」（Ibid.）が、目的の優先性はこれについても見出される。サルトルの挙げる例からこのことを確認したい。フランク王クロヴィスがカトリックに改宗する動機は「ガリアの政治的宗教的状態であり、司教団、大地主、下層民、この三者の勢力関係である」（EN490）。クロヴィスは当時のガリアのもつ政治的、宗教的な特性、すなわち状況についての客体的な側面に着目し、評価した。しかし、ほんらいガリアの状態への着眼点は多様でありうる。そして、他の仕方ではなくこの着眼点が選ばれるには、着目の仕方について一定の決められた方向づけが必要となる。この方向づけを支えるのが目的である。

ガリア征服という目的が立てられれば、その目的との関連において状況が特定の仕方で浮かび上がる。そこで捉えられた状況は、事後的に振り返ったとき、カトリックへの改宗にとっての動機を構成しているだろう。このように、状況のある観点からの把握は目的によって方向づけられている。その意味で目的は動機に優先する。

以上で前提されているのは、現実からの促しから自然発生的に行為が生成されてくるという、所与の現実に比重を置いたモデルではなく、非存在を定立する自由と結びついた試みを通じて状況を照らしだし、それにしたがって世界を別様に作り変えるという、非存在に比重を置いたモデルである[17)]。換言すれば、サルトルは欠如の認知とその充足として、世界への介入の機構を描いたのである。

4. 戦後テクストにみられる名づけとしての世界の変容

前節のおわりでわれわれは、行為の一般的な構造のなかに、所与のあり方とは別の仕方で、現実的な介入を通じて世界を再組織化するはたらきを見出した。戦後のサルトルはこのはたらきをとりわけ書くことないし語ることのなかに見出す。「語るということは変えることであり、自分が変えることを知っていることである」(RE92)。あるいは、彼の遺稿に記された言葉を借りるならば語ることは「未分化indifférenciée」(VE39) な「ある il y a」(VE19) にすぎない即自のなかに「明るみ luminosité」(Ibid.) をもたらし、存在の夜のなかから語られた事物を引き出し、際立ったものとすることである。さらに、言葉という音声的ないし物質的な媒体が用いられることによって、語る者による開示は他者との共有物となる。本節では、主に『文学とは何か』とその前身となった講演「作家の責任」を主に参照しながら、「変えること」としての語る行為についてみてゆきたい。

前節までにみた世界の別様な描き方は、情動や想像を喚起する主体、行為を企てる者という個人にとってのみ問題となっていた。戦後のサルトルはこの構造を言語行為に適用し、別様に描き直された世界のビジョンの共有について論じはじめる。

A) 知覚世界の配置転換

1946年に行われたユネスコでの講演「作家の責任」では、語ることが他者の知覚経験にもたらす変化について述べられる。

> 私がコップと言ったところで、確かに私は何一つ変えないように見える。だが実際には、この名前を呼ぶことによって私は、それを私に対し、また多分今まではそれを見ていなかった私の傍らの人に対して影からあらわれさせるのであり、それまでのその人の漠然とした知覚全体のなかでは、コップはおそらく他のもののなかに失われていたのである。したがってこの時からそれは彼にとって存在するのであり、これによって、たとえ極めて目立たぬ変化にせよ、彼の世界は変化したのである。(RE90)

言葉として表出され、際立たされた世界内の事物は、それを中心として語る主体の知覚世界を再配置する。こうした語ることによる即自的なものへの介入を、サルトルは「語ることにおいて、状況を変えようとする私の意図そのものを通じて、状況を開示すること」（Ibid.）であると述べる。しかしそれにとどまらず、語りを聞き届けた者もまた、自身の意図の外部で、名づけの行為に巻き込まれることにおいて、否応なく知覚世界の再組織化を体験する[18)]。前節まででみたように、サルトルにとって、主体はいくつかの仕方で所与の現実を、ありのままの形とは別様に組織化するはたらきを有していた。このことが書く、語るという次元で実行されるとき、そこには再組織化されたものの伝播の可能性があらわれる。

B）行為の名づけ

以上でみたように、名づけが事物に向けられる場合であっても、受け手にとっての世界のあり方は変容する。そして、それが他人の行為に向けられるならば、行為のあり方を変容させることになるだろう。サルトルは、語ることによる即自への介入、それによる世界の再組織化について論じつつも、関心を他人の行為についてなされた語りに向けている。『文学とは何か』では、作家による名づけという開示的行為が他者の振る舞いにもたらす変化について語られる。

> 語るとは行動することであり、人の名づける全てのものは、もはやすでに名づけない前と全く同じではない。名づけられたものは純潔さを失う。もしあなたがある個人の行為を名づけるなら、その人にその行為を呈示することになる。［このとき］その人は自分自身を見る。そして同時にあなたは全ての人に対してその行為を名づけるのだから、自分を見るときに自分が見られているということを知る。こうして彼自身が忘れていた密かな振る舞いは肥大なものになり、全ての人のために存在し始める。その振る舞いは客観的精神の一部となり、新たな次元を獲得し、再び息を吹き返す。（QL27-28）

語ることにおいて作家は存在の「純潔」を破り、語られたものを他の埋没した行為の連関のなかから際立たせ、言葉の導入によってあらゆる他者にアクセス可能なものとする。開示された行為は言葉を通じて反復、拡散可能となり、万人にとって開かれたものとなる。開示される者の側からすれば、行為に記述を与えられたとき、それはもはや自己にとって直接的なものではありえず、「以前と同じように行動することを望むこと」は困難となる[19)]。

5. 結び

本稿はサルトルの戦前・戦後の著作のなかに与えられたあり方とは別の仕方で世界を組織化する能力の探求という一貫性を見出すことで、これらの著作の企図における連続性を取り出しつつ、その理論の変遷を追ってきた。

ここで、本稿の論述を簡単にまとめておこう。『存在と無』以前の二著作において、サルトルは情動と

想像という意識作用のなかに、所与の現実を上書きする能力を見出した。情動論において取り上げられたこの能力は、想像力論で自由の問題と結びつけられながら発展的に捉え直される。さらに、われわれは『存在と無』の行為論のなかに状況への介入に拡張された議論を発見した。ここで、以前の著作において主観的な印象にとどまっていた世界の変化は、行為によって現実的な仕方で外化される。そして、戦後の著作ではとりわけ書く、あるいは語る行為が取り上げられた。書くこと、または語ることは言語のもつ共有可能性によって、他者にとっての世界経験を否応なしに変えるはたらきをもつ。ここにわれわれは、所与の現実にもたらされた変化が他者にまで伝播し、間主観的な広がりを獲得しうるものへと発展する点を見て取った。以上のように、サルトルの哲学的企図は一貫性を保ちつつ、その世界の変化というモチーフは、主観的なものからより外へ向けられたものへと開かれてゆく。以上が本稿において見出されたサルトルの哲学的企図における連続性と発展の経緯である。

冒頭で述べたように、本稿はサルトル哲学における思考の変遷を、伝記的エピソードに還元する解釈とは別の立場から、思想内容に基づいて整理してきた。しかし、本稿では各著作の一部を扱うにとどまっただけでなく、さらに後期の著作については論及するに至らなかった。以上の成果をもとに、より広範な著作を理論的な観点から読み解いてゆくことが、今後の筆者の課題である。

参考文献

外国語文献について邦訳があるものは既存訳を参照し、一部筆者の責任で表現をあらためた。

サルトル（Jean-Paul Sartre 1905-1980）の著作

Carnets ＝ « Carnets de la drôle guerre »in *Les mots et autres écrits autobiographiques*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2010.（『奇妙な戦争――戦中日記』, 海老坂武ら訳 , 人文書院 , 1985.）

EE ＝ *L'esquisse d'une théorie des émotions*, Hermann, 1939.（「情動論素描」in『自我の超越・情動論素描』, 竹内芳郎訳 , 人文書院 , 2000.）

EN ＝ *L'être et le néant*（1943）, Gallimard, coll. « tel », 1976.（『存在と無』I, II, III, 松浪信三郎訳 , 筑摩書房 , 2007, 2007, 2008.）

IMR ＝ *L'imaginaire*（1940）, Gallimard, coll. « Folio/ essai », 2005.（『想像力の問題』, 平井啓之訳 , 人文書院 , 1975.）

IMT=*L'imagination*（1936）, PUF., coll. « Quadrige », 2012.（「想像力」in『哲学論文集』, 平井啓之訳 , 人文書院 , 1957.）

QL= *Q'est-ce que la littérature ?*（1948）, Gallimard, coll. « Folio/ essais », 2008.（『シチュアシオン II』, 加藤周一ら訳 , 人文書院 , 1964.）

RE ＝ *La responsabilité de l'écrivain*, Verdier, 1998.

Sit. I = *Situations, I*, Gallimard, 1947.（『シチュアシオン I 』, 生田耕作ら訳 , 人文書院 , 1965.）

Sit. IX=*Situations, IX*, Gallimard, 1972.（『シチュアシオン IX』, 海老坂武ら訳 , 人文書院 , 1974.）

VE=*Vérité et existence*, Gallimard, coll. « NRF/ essais », 1989.（『真理と実存』, 澤田直訳 , 人文書院 , 2002.）

その他の文献

荒金直人 ,「サルトルの『像形成的意識』（la conscience imageante）についての研究」in『人文科学』第 25 号 , 慶應義塾大学 , 2010, pp.31-55.

-「サルトルの像理論における類比的表象体の実体化について」in『フランス語フランス文学』第 53 号 , 慶應義塾大学 , 2011, pp.35- 49.

BERGSON, Henri, Essai sur les données immédiates de la conscience; PUF, coll. « Quadrige », 1927.（ベルクソン , アンリ ,『時間と自由』, 中村文郎訳 , 岩波書店 , 2002.）

BUTLER, Judith, *Subjects of Desire*, Columbia University Press, 1987.

FLAJOLIET, Alain, « Deux descriptions phénoménologiques de l'imagination »in *Alter*, n° 10, 2002, pp. 119-156.

箱石匡行 ,『サルトルの現象学的哲学』, 以文社 , 1980.

HEIDEGGER, Martin, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer, 1929.（『存在と時間』上 , 細谷貞雄訳 , 筑摩書房 , 1994.）

HUSSERL, Edmund, *Husserliana, XIX /1*, Nijihoff, 1984.（フッサール , エドムント , 立松弘孝ら訳 ,『論理学研究』2, 4, みすず書房 , 1970, 1976）= LU II/1

フッサール , エドムント ,『イデーン　I-II』, 渡辺二郎訳 , みすず書房 , 1984. = Ideen I

ジェイムズ , ウィリアム ,『心理学』下 , 今田寛訳 , 岩波書店 , 1993.

JANSEN, Julia, “Phenomenology, Imagination and Interdisciplinary Research” in *Handbook of Phenomenology and Cognitive Science*, Springer, 2010, pp. 141-158.

レヴィ , ベルナール＝アンリ ,『サルトルの世紀』, 石崎晴己監訳 , 藤原書店 , 2005.

森功次 ,「初期サルトルの芸術論における想像と現実」in『美學』第 60 巻 , 第 235 号 , 2009, pp.16-29.

澤田直 ,『新・サルトル講義』, 平凡社 , 2002.

滝浦静雄 ,『想像の現象学』, 紀伊國屋書店 , 1972.

ヴァルデンフェルス , ベルンハルト ,『フランスの現象学』, 佐藤真理人監訳 , 法政大学出版局 , 2009.

注

1）戦前戦後のサルトル哲学の内的な連関性について論じたものとして以下の先行研究に言及しておきたい。箱石 1980 はその序論において『存在と無』に至るサルトルの足跡を「現象学」への取り組み方に注目しつつ論じる。同書ではそこに一貫した動機を見出すというよりは、議論の整理に努めている。また、ジュディス・バトラーは『欲望の主体』第三章において主に欲望と想像の関係に着目しながら、初期の著作から『家の馬鹿息子』までのサルトルの仕事について論じている（Butler1987）。そこで中心的に扱われるのは欲望の現実的な充足不可能性というパラドキシカルな状況と、それにもかかわらず引き起こされる充足に向けた運動である。欲望の概念に注目するとき、バトラーの分析は実存的精神分析へと向けられるが、本稿では主観的印象としての世界変容から現実世界への介入、さらに他者にとっての世界経験へとサルトルの論述が進む点に注目し、そこに一貫性と発展の過程を見出す。

2）たとえば以下のような記述に基づく。「私の著作のいくつかの面を、私の自伝から説明したいと思います。それは、どうして私が第二次世界大戦後に、根本的に物の見方を変えてしまったのかを理解していただくことに役立つでしょう。簡単にいえば、人生が私に「物の力 force des choses」を教えたのだと言ってもよいでしょう。実際、私は『存在と無』の頃にすでにこの「物の力」を見出しはじめるべきでした。というのも、この頃にはもう、自分が望みもしないのに兵隊にさせられたりしていたのですから」（Sit. IX 99）。

3）2000 年以降に注目を集めたものとしては、ベルナール＝アンリ・レヴィによる『サルトルの世紀』における読解がある。同書はサルトルの思想の傾向性を第一のサルトル、第二のサルトルに分離した上で、初期の偶然性の哲学、単独者の称揚やアンチヒューマニズムといった側面をより肯定的に評価する。

4）ヴァルデンフェルスは以下のように述べる。「著名な試論「文学とは何か」においては、とりわけ第一部と第二部で、言語記号の機能、書くことや読むことという活動、著者と読者のあいだの意思の疎通に関する諸分析が見出される。こうした分析は、さまざまな点で、初期の〈想像的なもの〉の理論に結びついており、現象学的に方向づけられた

創造美学および受容美学の立場に徹頭徹尾立っている」（ヴァルデンフェルス 2009, p. 114）。われわれは同書におけるサルトル評価に全面的に同意するわけではないが、上記の点については同意している。

5）EE22ff. 意識の「状態」の記述によって人間存在を探求する研究（ないし芸術的創造）への批判は、サルトルの留学時代に執筆されたテクストである「フッサールの根本概念：志向性」以来、初期著作に一貫してみられる。「志向性」論文では、プルーストの心理分析的なスタイルが「内的な生」（Sit. I, 32）に人間を限定するものとして批判的に言及される。この論点は『想像力の問題』において「内在という錯覚」（IMR17）批判として反復される。ユリア・ヤンセンはこの批判がデネットのカルテジアン劇場批判と類似すると指摘している（Jansen2010）。

6）主として言及されるのはウィリアム・ジェイムズである。ジェイムズは『心理学要論』（1892）第二十四章「情動」において、身体の生理学的変容と情動のあいだの相関性に言及している。ただし、ジェイムズはその情動論をたんなる唯物論とみなさないよう注意を促している。

7）Bergson1927, 第 1 章参照。

8）ただし、ここで論じられるのは想像ではないことに留意されたい。サルトルにとって想像は対象を不在のものか非存在のものとして措定するが、「魔術」において問題となるのは把握された対象の特定の性質にかんする変化である。

9）主として『イデーン　I』第 111 節における中立性変容としての想像に関わる箇所が参照されている。フッサールは存在措定の差し控え、ないし中性化として想像を記述するが（Ideen I, 224ff.）、後述するように、サルトルにとって想像は否定のカテゴリーと関係づけられる。

10）「イメージという語は意識の対象への関係のみを示すものであり、別言すれば、対象が意識にあらわれるその仕方であり、こう言いたければ、意識が対象を自らに与えるその仕方だといってもよいだろう」（IMR21）。

11）「［想像的対象としての］ピエールの特徴とは、信じられがちであるように、非直観的 non-intuitif であることではなく、直観に不在のものとして与えられた、〈直観的 - 不在的 intuitif-absent〉であることである」（IMR34）。

12）「イメージ［想像作用］とはその内的な本性の内に根本的な弁別の要素を含んでいるべきだ。この要素を、われわれは［…］想像的意識の措定作用のなかに見出す」（IMR32）。

13）措定自体の差し控えは、別の箇所で「措定されないこと ne pas être posé」（IMR351）と言い換えられるように、サルトルにとって否定として特徴づけられる。サルトルが想像力論を展開するにあたって参照するフッサールの議論では、中立化はあくまで〈存在するかのようなものとしての対象の把握〉であり、そこでは対象の措定は行われない（Ideen I, §111）。そのため、サルトルの定式化に対してフッサール解釈が不十分であると、批判的に評価されることがある。たとえば、滝浦静雄は「中立性変様ははたして無の定立なのだろうか」（滝浦 1972, p.70）と疑問を呈する。想像における中立化を否定性において捉えるサルトルの態度については多くの研究者が言及している（森 2009, 荒金 2010. この点について主題的に論じたものとして Alain2002）。

14）フランス語の dépasser は伝統的に Aufheben の訳語として、ヘーゲル哲学における止揚の意味で用いられるが、ここでは「超え出ること」、「乗り越えること」という意味で用いられる。

15）もう一点指摘しておくべきことは、『存在と無』において目的は表象を意味しないという点である。想像的対象がしばしばビジュアルイメージと有意な差異なしに語られるのとは異なって（とりわけ『想像力の問題』第 1 部第 2 章の第 5 節以降）、『存在と無』の行為論における目的は以下のようにサルトル自身によって特徴づけられている。「けれども、この構想は、可能としての都市のたんなる表象ではありえないだろう。この構想は、その都市を、望ましいがまだ実現されていない一つの可能であるという、本質的な特徴においてとらえる」（EN478）。目的は表象ではなく、いうならば表象の期待である。

16）動因としての感情は、情動論で論じられる意識作用としての情動より、想像的意識に統合される感情性 affectivité、感情 sentiment ないし欲望 désir と関連づけられるべき概念である。IMR135ff および IMR267ff 参照。とりわけ欲望の自己発展について論じられる際、サルトルの提示する構図は、本論で扱った『存在と無』における行為論の示す構図ときわめて類似する。

17) このモデルは行為における人間の万能性を称揚するものではない。サルトルは目的に根ざした行為の挫折や、状況との葛藤についても論及する。

18) ここでサルトルが、絶対的沈黙を破る最初の言葉を主題化している点を指摘しておく必要がある。一定量の名づけが流通し続ける言論空間内で語る行為を通じた関係性の再組織化がいかに生じるか、という点については別の機会に検討したい。

19) サルトルによる評伝『聖ジュネ』出版後、ジュネが「丸裸にされ」、以後数年に渡り執筆できなくなったことを想起されたい。澤田 2002 では以下のように紹介されている。「サルトルの『聖ジュネ』から十年以上たった一九六四年、初めて『プレイボーイ』誌上での長いインタビューに応じたジュネは次のように述べている。「あの本は私を嫌悪で一杯にした。他人の手で自分が裸にされたのを見たからだ［…］」」（澤田 2002, p.102）。

Describing the World Anew: An Essay on the Philosophical Aim of Sartre's Early Works

Shintaro AKASAKA

Summary:

This study argues that the early works of Jean-Paul Sartre (1905-1980) represent a coherent attempt to create a philosophical theory that allows us to organize the given world in a different way.

In *Sketch for a Theory of the Emotions* (1939) and *The Imaginary* (1940), Sartre explores the capability of writing something new on the given world. When a human subject faces the impossibility of acting, some emotions emerge and then the subject reorganizes the world in a new way. In the theory of imagination, Sartre relates the capacity of rewriting to the concept of freedom. These two acts, however, are only subjective impressions. After these books, in the theory of action in *Being and Nothingness* (1943), Sartre starts to argue on intervention in real and objective situations. In *What is Literature?* (1948), applying the results from his former works, Sartre focuses on the act of writing. This act inevitably reshapes the experiences of others because of its communicability. The author discovers here that the changes brought to the given world are shared among people and spread in the intersubjective field.

Key Words : Sartre, phenomenology, indeterminism, imagination, freedom